

論文

中途身体障害者の複線的スポーツキャリア形成プロセスと他者関係性

——ある車椅子バスケットボール選手のライフヒストリー——

The Relationship between a Person with an Acquired Disability and Others in the Process of Double Sport Careers Development: The Life History of a Certain Wheelchair Basketball Player

吉田 毅

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2018年9月15日 受理)

I. 問題設定

障害者においてスポーツは、リハビリに限らず「楽しみや生きがい、QOLの向上、自立や交流の促進等、様々な意味で有用とみられる」(吉田, 2014, p.856)。受傷した後、実際にスポーツが自身の生活の中で貴重な活動領域となった身体障害者(以下「身障者」と略す)が認められる(吉田, 2012, 2014, 2016)。それゆえ、ますます障害者スポーツを振興していくことが重要と言えるが、スポーツ社会学では障害者及び障害者スポーツの理解はもとより、正しく障害者スポーツ振興に寄与すべく、1980年代頃から特に身障者を対象とした「スポーツへの社会化」(socialization into sport)に関する研究が行われている¹⁾。スポーツへの社会化とは、この研究領域の先駆者 Kenyon and McPherson (1973)によれば、個人があるスポーツ役割を学習、取得していくこと、換言すれば個人があるスポーツに何らかの形で習慣的、継続的に参加するようになることを意味する。

しかしながら、障害者のスポーツへの社会化研究は、およそ1970年代から蓄積されてきた健常者のそれと比すれば数少なく、「いまだに揺籃期」(藤田, 2013, p.23)にあると言わざるを得ない²⁾。わが国では特に低調であるが、1990年代終盤から、主に「障害者スポーツの花形種目」(吉田, 2014, p.856)と言すべき車椅子バスケットボール(以下「車椅子バスケ」と略す)に参加する身障者を対象に進められている。そうした言わば身障者の車椅子バスケへの社会化研究は、先天的身障者を対象とした藤田(1998)を端緒に、近年では中途(後天的)身障者を対象に行われている(吉田, 2009, 2014, 2016)。元Jリーガーの現役引退等に関する研究(吉田, 2012)もその一環として捉えることができるが、これらの研究では対象者がわずかに過ぎず、中途身障者の車椅子バスケへの社会化の様相について全容を解明するためには研究蓄積が求められる。そのため、本稿ではこの点に関して、新たなタイプの中途身障者に着目し更なる検討を加える。

II. 先行研究と本稿の目的

健常者を対象としたスポーツへの社会化研究では従来、主として「社会的役割—社会システム論的アプローチ」(Kenyon and McPherson, 1973)が方法論とされ、個々のスポーツ参加への影響要因が分析されてきた。特に社会化の担い手として「重要な他者」³⁾が着目され、それは誰かが問われてきたのである⁴⁾。一方、中途身障者の車椅子バスケットへの社会化研究(吉田, 2012, 2014, 2016)では、対象者が受傷してから車椅子バスケットへの社会化を遂げていくプロセスで寄与した具象的な他者、換言すれば当該他者がどのように(なぜ)重要なのかという点に主眼が置かれた。というのも、他者は多様性に富み(井上・船津編, 2005)、他者を重要な他者という「抽象度の高い概念で括ってしまうと、対象者にとっての他者の意味や重要性の程度等が把握し難いという問題が生ずる」(吉田, 2014, p.856)からである。

結果として、中途身障者がスポーツへの社会化を遂げるには種々の他者が貴重な存在であることが示された。つまり、中途身障者のスポーツへの社会化プロセスが「心身が車椅子バスケットに参加し得る状態になる」までの「療養局面」(吉田, 2014)ないし「準備局面」(吉田, 2009)と、「その後の車椅子バスケットに参加し打ち込み続けるようになる」までの「社会化局面」(吉田, 2014)ないし「主要局面」(吉田, 2009)とに大別され、各局面で次のような他者が見出された。前者においては「かけがえのない他者」(吉田, 2012, 2014)、「力づける他者」及び「癒す他者」(吉田, 2014)であり、後者においては「仲間」及び2つの意味での「導く他者」(吉田, 2012, 2014)、また「かけがえのない他者」(吉田, 2012)、「誘う他者」(吉田, 2014)である。更に吉田(2014)においては、上記他者のうち「誘う他者」以外は後述のような「親密圏」を築く他者と捉えられた。

こうした研究は、重要な他者という既存の概念に囚われず、中途身障者のスポーツへの社会化に寄与する他者の意味的差異に留意し、当該他者がどのように重要なのか(寄与したのか)という上述のような問いの解明に資する新規的な試みとして有意義と言えよう⁵⁾。また、社会学では近年において親密圏、つまり「具体的な他者の生への配慮／関心を媒体とするある程度持続的な関係性」(齋藤, 2008)、そうした「間—人格的」な「関係性」である「親密性の圏」(齋藤, 2000)に関する理論的、概念的な検討が活発化しているが(野口, 2013; 落合, 2013; 桶川, 2011; 筒井, 2008; 上野, 2009; 山田, 2005)、実証研究は高谷(2009, 2012)がみられる程度である。もとよりHabermas(1962 = 1994)は愛に満ちた共同体とも言うべき近代的な「小家族」を親密圏と同一視したのであるが、現代では必ずしもそのようには捉えられなくなっており、変容する親密圏の実相について検討を重ねていくことが重要な課題とみられる⁶⁾。吉田(2014)の試みはこの点でも意義が認められよう。

ただし、吉田(2009, 2012, 2014)が対象としたのは、受傷後に車椅子バスケット活動だけに参加し続けた中途身障者、換言すれば単線的スポーツキャリア(1つのスポーツ活動のみへの参加というキャリア)を形成した者に留まる。そこで吉田(2016)は、中途身障者はそればかりが望ましいわけではないとし、受傷後に複線的スポーツキャリア(複数のスポーツ活動への並行的な参加というキャリア)を形成していった元カーレーサーの上記キャリア形成に寄与した具象的な他者について検討を加えた。その結果、療養局面では先行研究と同様の「かけがえのない他者」と新たに「寄り添う他者」が見出され、これらは親密圏を築く他者とも捉えられた。車椅子バスケット活動とレクリエーション的なレース活動とが並行する社会化局面では、先行研究と同様の車椅子バスケットと「誘う他者」と「導く他者」、また新たに、車椅子バスケット活動の精

神的支えとなる「寄り添う他者」と、レクリエーション的なレース活動へと「つなぐ他者」が見出され、誘う他者以外は親密圏を築く他者とも捉えられた。

ここで留意すべきは、複線のスポーツキャリアを有する中途身障者もタイプは1つでないということ、また上記キャリア形成プロセスにおける他者（具象的な他者を含め）関係性の様相も一様ではない可能性があることである。吉田（2016）が対象としたのは複数のスポーツ活動をずっと継続した中途身障者であるが、本稿では新たなタイプに着目する。つまり、複線のスポーツキャリアを有するとはいえ、車椅子バスケット活動を続ける一方、もう1つのスポーツ活動からドロップアウト（中途離脱）した中途身障者A氏を対象に、氏の複線のスポーツキャリア形成プロセス、換言すれば車椅子バスケット及びもう1つのスポーツへの社会化プロセスにおける他者関係性について解明することを目的とする。

Ⅲ. 方法

方法はライフヒストリー法を用いる。ライフヒストリーとは、端的に言えば「時間的パースペクティブ」を有する「個人の生活の過去から現在までの記録」（谷，1996，p.6）であるが、障害者を対象とする本稿では次の点を踏まえる必要があろう。

野口（2005）はナラティブ・アプローチの視座から、障害者という「クライアント」にアプローチする際には「専門家はクライアントの生きる世界について『無知』であり、クライアントこそが専門家である」から「その世界をクライアントに教えてもらおうという姿勢」、つまり「無知の姿勢」が肝心であると言う。この指摘は本稿でも示唆的である。星加（2008，p.226）によれば、ディスアビリティ・スタディーズ（障害学）でも「当事者性の意義」が「重視されてきた」。そのため本稿も、当事者である障害者の目線に留意し、

徹底して対象者へのインタビューで得た語りを基にライフヒストリーを構成する⁷⁾。中途身障者の他者への意味づけを踏まえながらキャリア形成プロセスを捉えるには、こうしたライフヒストリー法が妥当とみられる。

ただし、ライフヒストリー法では「調査者の視点と問題意識」（谷，1996，p.7）が明確でないと、取りとめのない記述となるおそれがある。そのため、対象者の目線とともにそれらも反映し得る半構造化インタビュー法を用い、対象者A氏の半生をスポーツ活動、ライフイベント、また他者関係性を軸に探った。そうした中、A氏の語りで重視すべきと判断された点に踏み込んだ⁸⁾。インタビューはA氏の回想による誤謬を防ぐため2回に分けて実施した。1回目は2006年3月にA氏の居住地域の飲食店でメモをとる形式、2回目は2012年3月にA氏の練習拠点である体育館ロビーでICレコーダーに録音する形式で実施した。時間はいずれも90分ほどであった。なお、A氏は筆者の知人である車椅子バスケット関係者に紹介して頂いた。氏からA氏に調査の主旨等を伝えて頂いた上で、筆者がA氏に電話で調査協力の依頼をすると快諾して下さった。A氏とは調査協力の依頼をする際にいろいろと言葉を交わしたこともあり、インタビューの際のラポールは良好であった。

ライフヒストリーの呈示に際しては、先行研究（吉田，2012，2014，2016）と同様に対象者の語りと筆者の解説とを交えて呈示する「二重奏形式」（小林，2000，p.109）を用いるが、上述の通り当事者性を重視し、肝心な部分ではA氏の語りをそのまま示す⁹⁾。A氏の語り（解釈）を更に調査者が解釈するという「二重の解釈」（小林，1995，p.69）の問題も看過してはならない。この点については語りの恣意的解釈（曲解）に留意し、ライフヒストリーを呈示する際に語りを慎重に扱うより他はない。なお、A氏には氏名をはじめ実名を表記してよいと言われたが、そうすると「予測できない迷惑が、本人ないし関係者にかかるおそれがある」（桜井，2002）。その

ため、A氏の承諾を得た上で全て匿名表記とすることにした。

IV. A氏のライフヒストリー

では、A氏のライフヒストリーを呈示しよう。はじめにA氏が受傷するまでについて、次に療養局面と社会化局面について順に呈示する。以下では、「」はA氏の言葉、……は中略、（ ）は筆者の補足を表す。

1. 受傷するまで

A氏は1970年10月、関西地方のK市に生まれた。6人家族（祖母、両親、4歳違いの姉、3歳違いの兄、A氏）であった。A氏が小学1年の時に両親が離婚し、母親は家を出た。A氏はその後「姉ちゃん子」になった。厳しいが面倒見のよい姉に「一目置いていた」と言う。小学5年の時に祖母が他界した。A氏は幼少期から活発で近所の子と遊び回った。小学時代は良くサッカーや野球に興じる一方、「やんちゃ」で「ごんた（ごろつき、いたずらっ子）」と呼ばれるほど素行が悪かった。

中学生になると当初より、かつて兄が着ていた不良っぽい学生服で登校したため「似た者が寄ってきた」。やがて不良仲間に入った。そんな中、「珍しいからやってみたい」とハンドボール部に入部したが、同部は全国レベルの強豪であり、すぐに「練習がしんどいから辞めちゃった」と言う。その後は「単車（バイク）」にはまった。「いわゆる、人にみたくれっていう」暴走行為もするようになった。「中学んときが一番悪かった……喧嘩もした」。補導されたり、父親に児童相談所に連れて行かれることもあった。

卒業後は進学せず、兄が勤める会社の下請け会社に就職したが、「命令されるのが面白くない」と1月も経たずに辞めた。「兄にしばかれた」と言う。その後は「今で言うフリーター」となった。「あまり人に言えないよ

うな仕事」もした。バイクでは暴走行為ばかりではなく、ドライブがてら「山を走りに」行ったりもした。事故に遭ったのは16歳の秋であった。暴走行為中ではなく、「集団でこう、たむろしとったんですよ。……ちょっとパッと走ってくるわっていう中での事故」であった。バイクに友人と2人乗りして遊んでいた際に車と激突し、激しく跳ばされた。1台目の救急車が「首切って、血ふいてた」という「連れ（友人）」を運んだ。A氏は「3、40分かかるぐらい」のG市にある「おっきな病院」、L病院に2台目で搬送された。

2. 療養局面

A氏は翌年5月まで、およそ8ヶ月L病院に入院した。当初は1週間ほどICUに入り、その後「普通の6人部屋」に移った。A氏は手術を4回受けた。「背中やって、足やって、背中もう1回」と「膀胱の結石」の手術であった。「3ヶ月ほど」は「ずっと寝たきりで天井ばかりみてた」。この間、A氏は自身の怪我について次のように思っていた。

【語り1】「頭蓋骨、割れてたんで。あと、まあ足から恥骨や坐骨や、いろんなところ折れてたんですけど……まあ治るって思ってたね。……弁慶の泣き所っていう所ですか、あそこが真つ二つに割れとったんですよ、骨がね。それでそこも手術して、背中も開いてすぐ手術したんですけど、そこにギプス巻いてたんで、これのせいで俺動かれへんのやって思ってたんですよ。で、何か知らんけどちょっとこう、感覚ないとこ一杯あるんですけど、それは何かまあ痺れとんやろうって、まさかの世界で、まあ骨折れたから治るわと」。

A氏はこのように「落ち込む怪我じゃない」し、また正月に皆で（バイクで）走ろう」と楽観視していた。治らないとは「微塵」も思わなかった。見舞いに来てくれた「友達」と「早く出たい遊びに行きたい、ひたすらそれだけでしたね」と言う。「親兄

弟」は「ちょこちょこ来てくれ」たが「ほとんど話もせず」にいた。

事故から3ヶ月ほど経つと、医師から直接に「脊髄折れてるから……このまま一生治らへんと思う」と告げられた。「そこからですね、べこっとへこんじゃいました……その日はもう何か、ずっと泣いてましたね」とA氏は言う。「世界一不幸やわ」と心境が一変したが、程なくして車椅子に乗れるようになった。「そこから座れるようになって」、身体機能が「段々」改善し、やがて自宅に外泊することができた。その際の様子を次のように言う。

【語り2】「正月にはもう、やっと家に帰ったんですよ。(事故から)4ヶ月目ですよ。家帰ったというか外泊で、……外泊した時に、連れとかが誘いに来てくれて、車出して遊びに連れて行ってくれる。そういうのがあったんで、あー嬉しい話やなと」。

また、家族とご飯を食べた際、父が発した言葉が「グッときた……めっちゃ覚えてるんですよ」と言う。

【語り3】「兄ちゃんと姉ちゃんとお父さんと俺と4人でご飯食べた時に、お父ちゃんが久しぶりやなって、こう改めて、4人でご飯食べたのはいつ振りやと言った時にちょっと、うるうるきちゃって、お父ちゃんもちょっと涙目で久しぶりやなと、ちょっと、やっぱりそんだけ迷惑かけたなっていうものもあるし、……ずっと支えになってますね、その言葉。……今も胸にあるんです、……その言葉で何か家族っていう感じしましたね、家族なんやっていう。お父ちゃんはその、僕の事故から、頭が真っ白気になっていって……俺のせいやなって、苦労したら白髪になるっていうの初めて体験したというかみたって、びっくりしましたね」。

病院に戻ると、「立つ訓練」や「立って血

流変えたりとか、いわゆる一般リハビリ」が始まった。「まだ治療」もあった。そんな中、「連れ」が夜間に「単車」で「ちょいちょい」病院の前に誘いに来た。A氏は「パジャマのまま病院出て、駐車場に車椅子置いて、友達に単車乗せてもらって……走りに行った」ことが「1回だけ」あった。その際は看護師にみづかり「減茶苦茶怒られました」と言う。また、「友達」や「兄ちゃん」と「外に普通にご飯食べに行ったりとか」もした。「迎えに来てくれた」という人達は「連れ」、「暴走仲間」、地元の「先輩から後輩」等「一杯」いた。「全員友達」で「いつも遊んでたグループが入れ替わり立ち代わり」来てくれたが、なかでも中学校時代の同級生H氏は「一番仲の良かった」特別な存在、「親友」であった。H氏についてこう語る。

【語り4】「やっぱり一番はこいつです、こいつは最初から最後までもう。……ボンと連れ出していったり、何か行こうかってやってくれたのはもう全部こいつですね。……中学卒業する頃かな。まあ卒業前までずっと、遊んではいたんですけど、中学3年ときぐらいから。でも、卒業してからすごく仲良くなりましたね。……いっつも飯食いに行っただけですよ。……やんちゃなグループに入ってたやんちゃなやつですよ、別に真面目なやつじゃない(笑)。……ずっと一緒でした。……遊び仲間、飯仲間、飲み仲間。毎日でしたね」。

H氏をはじめ友達は「(A氏を連れて)行ける場所を選んでくれ」たりA氏を気遣ってくれた。A氏は彼らに対し、「こんなでずっと遊ぶのしんどいしなとか、辛いよな悪いよなって、いろんなありましたね、悪いなって気持ちは一番あった」と言う。「もうそんな、わざわざ合わせて遊ばんでえでと、もっと楽しいことしてえでとか」思いつつも「友達と遊んでたので、まあこうね、ふっ切れてはいないけどこう、忘れさせてもらっ

てた」し「楽しかった」。そんな中で「ドンドン自分も元気になって」きた。「車椅子の乗り降りとかも……だんだん達者になって」きた。5月になると退院し、リハビリ施設へ移った。車椅子での移動は「もう全然いけますね」というレベルに達していた。

3. 社会化局面

A氏は「社会復帰というか、自分で生活するため」に、翌年3月末までリハビリ施設で過ごした。そこでは「(自身の状態が)世の中で一番酷いと思っていた世界が変わった。……すごいたくさんいろんな障害者の人がいるんですよ。……自分の方が軽いやって、びっくりしました」と言う。L病院では「障害者との接触が全く」なかったのである。

数ヶ月間はリハビリを「何となくやっていた」。そんな中、A氏はまず、周りから誘われ車椅子マラソンを始めた。夏になると、車椅子バスケットIクラブのメンバーがA氏の所に「やらへんか」と「誘いに来た」。A氏は誘われた理由について「もしかしたら体育の先生が、チーム(Iクラブ)の人に、粋のえーのおるぞとかって言ったかもしれないです」と察する。Iクラブが練習している体育館はリハビリ施設に隣接しており、A氏の「体育訓練」を担当する先生とIクラブのメンバーとは身近な関係にあったからである。

A氏はL病院に入院している間、医師から「あっち(リハビリ施設)行ったら車椅子バスケットとか何かいろいろスポーツやってるよとは聞いてた」が、Iクラブのメンバーから誘われるまでは「(車椅子バスケットを)みに行くこともなく、そんなこともすっかり忘れてるような状態」であった。軽い気持ちで練習をみに行くと、「もうすごいやっててウワーこんな絶対無理や」と感じる反面、「何かしたいなあってのはあった」し「やりたいて」思った。程なく競技用車椅子を借りて練習に参加すると容易ではなかった。「できなかったんですよ最初、ボールも届かへんし」と言う。

間もなく、同じ体育館で練習している強豪PクラブのN氏がA氏の「師匠」となる。N氏はA氏と同じ左利きであったため、Iクラブの先輩がN氏に「教えてくれへんか」と頼んだのが発端である。A氏は当初、「(両クラブのメンバーは)皆一緒に練習してるから一緒(のクラブ)やと思うてた」。それだけ両クラブは敵対するとはいえ友好的な関係にあった。やがてA氏は予定通りIクラブに入ったが、Iクラブの方が「目茶目茶弱かった」。

N氏は体育館の近くにある職業訓練施設の事務職員であり、車椅子バスケットで世界選手権日本代表であるばかりか、陸上競技の短距離種目でもパラリンピック出場という輝かしい経歴を有していた。A氏はN氏について、まずこう語る。

【語り5】「バスケットに関してはこの人との出会いがすごかったですね。……切り口ですからね。……左利きですごく親切に教えてくれたんですよ。……師匠なんて言ったことないですけど。まあ一番の、こう、何やろなー、まあ師匠ですよ、言葉が出てこないですけど。……バスケットでバンバンバンバン上がるためにNさんがいろいろ教えてくれた」。

A氏は10月に自動車免許を取り、それから車椅子バスケットを「かなり本気でやりだしました」と言う。N氏に教えてもらう回数も増え「伸び率が大幅変わってきた」。また、「やったらやるだけもうすぐ目にみえて、自分で分かるんですよ、ちょっと速くなってるよ。で、練習でこうアップで走るじゃないですか。で、追いつけなかった人に対して、すぐ追いついていくんですよ、そういうのがね、楽しくて」と言う。

リハビリ施設入所中は、「週に2回あった」Iクラブの練習に留まらず、体育館の休館日以外は自主練習に励んだ。「ひたすらバスケットしてたんです僕」と言う。「坂上

り」も「お昼と晩と、1日2回、必ず」行った。N氏が教えてくれた「(練習)メニュー」を「ひたすらやってた」。リハビリのメニューよりも「タフやんと思いながら」車椅子バスケット「づけ」の生活を送った。N氏との関係についてA氏はこうも語る。

【語り6】「Nさんが、独身やったんで、晩ご飯も毎日一緒に……で、あの一付き合い合ってくれててそういうのでいろんな話もさせてもらって、まあいい話悪い話あるかもしれないですけど、まあ人とね、連れと、楽しいこと以外ねしなかったようなことを、怪我してこう人の話をじっくり聞いたり、聞いてもらったりってなかったんですよね。そういうのはすごく、今までなかった人生の中であったのかなと思う」。

N氏の他に「チームメイト」も重要であった。「(彼らは)きっかけじゃなくて、ずーっと長いことやってるので当然、ありますけど、それも皆チームなんで」と言う。また、「体育館の職員」や「Y先生」も「おっき」かった。Y先生は「僕がおる時から、すごいバリバリで「協力的にいろんな所回してくれたり、いろんな環境を知らない間に与えてもらってたのかもしれないですね、分からないですけど」と言う。

A氏はリハビリ施設で11ヶ月ほど過ごした後、隣接する職業訓練施設に移った。そこで所定の訓練を重ね就職するまでの1年間も、N氏の「教え」を受けながら「昼休みも体育館来て、(訓練が)終わったらすぐ体育館来てひたすら」車椅子バスケットに打ち込み続けた。試合に出場することもあった。

他方、先に始めた車椅子マラソン活動も続けた。「昔は二足のわらじいけとったんですよ。代表レベルやったら難しいですけど。今はもう全然違う、トレーニング専門化してるんで無理なんですけど」と言う。職業訓練施設入所中は「(競技成績としては)どっちかというと代表的なのは陸上の方」であった。

「全国ハーフマラソンで優勝した」のであり、全国身体障害者スポーツ大会やフェスティック大会にも長距離種目で出場した。

とはいえ、A氏は車椅子マラソン活動に惹きつけられることはなかった。「味気なかった」のである。退所後、車椅子マラソン活動を止めた。A氏はそれについて心境をこう語る。

【語り7】「これはちょっと面白くないと。何か勝っても1人やし、どうなんかなと。……こんなほとんどポツと出て優勝して本当そんなんでいいのかなっていうのと、あと、練習が面白くなかったんですよ。……一緒に練習したり教えてくれとった先輩はおるんですけど、何かさびしかったというか……性格的に皆とワイワイやるのが好きなのもあるんですけど……さびしがりやなんです」。

A氏はずっと車椅子バスケットにウェイトを置いていた。電気関係の会社に就職した後も車椅子バスケットに励んだ。「(N氏と練習する)回数はちょっと減りましたが当然」のようにN氏の指導も暫く受けた。A氏は上達が速く、翌年には日本代表に選出された。Iクラブはその翌年、Pクラブを凌ぎ全国大会に初出場し優勝を遂げた。A氏はその後も日本代表として活躍した。

V. 考察

1. 療養局面における他者関係性

A氏は事故から3ヶ月ほど、骨折だから「治る」と思い続けていた(【語り1】)。それだけに、告知されると「世界一不幸やわ」とかなり落ち込んだ。やがて、身体機能が改善し自宅に外泊した際、正しく親密圏を築く種々の他者が認められる。

まず、【語り2】から、A氏に対する「連れ」の気配りと、それをA氏が「嬉しい話やな」と受け取ったことが分かる。そうした

「連れ」は、A氏の療養生活で精神的支えになったという点で「困難克服へ向けた営みのサポート役となり得る」他者である「仲間」（吉田, 2012, p.591）とみてよい。また、【語り3】のように、A氏は家族で食事をした際の「久しぶりやな」という父親の言葉で「家族って感じる」を覚え、それが「ずっと支え」となった。食事の際に、A氏は父親との絆を実感したに違いない。しかも、白髪が増えた父親をみて、「迷惑かけた」父親の自身に対する親身な思いを感じずにはいられなかった。それゆえに、社会復帰へ向かうにあたり父親が精神的支えとなった。父親は、先行研究で見出された「過酷な困難を克服するために必要な気力の源泉となる代わりなき他者」である「かけがえのない他者」（吉田, 2014, p.863）と捉えられる。

A氏が病院に戻った後にも、周囲には「連れ」の他に「暴走仲間」、地元の「先輩」や「後輩」等がいた。そうした「入れ替わり立ち代わり」来てくれた「グループ」も上述した「仲間」に他ならない。A氏の精神的支えとなり心の快方に寄与したとみられる。他方、【語り4】から分かるように、「一番仲の良かった」という「親友」H氏は「仲間」といっても、先行研究でも見出された「当人の傍に寄り添い精神的支えとなる他者」である「寄り添う他者」（吉田, 2016, p.63）と捉えるのが妥当である。A氏は各々により、「ふっ切れてはいない」ものの「ドンドンドン自分も元気になってきた」のである。

このように、A氏が療養局面を乗り越えるのに貴重な存在であったのは、程度の差こそあれ「かけがえのない他者」（父親）、複数の「仲間」、それに「寄り添う他者」（親友）であり、いずれも他ならぬA氏に対して親身で持続的、人格的な関係性を有していたとみられ、親密圏を築く他者とも捉えられる。先行研究（吉田, 2012, 2014, 2016）で見出されたこの種の他者は、家族、医療スタッフ、親友であるから、対象者との間柄という点では仲間という新たな知見が得られたと言える。

中途身障者の交友関係によっては、そうした仲間も親密圏を築くことがあるのだろう。ともかく、中途身障者が心身ともに過酷な状態にある療養局面を克服するにあたり、基本的には受傷前に築かれていた親密圏が精神的支えとして貴重な存在となることが窺われる。

2. 社会化局面における他者関係性

「社会復帰」へ向けリハビリ施設に移ったA氏は、そこで車椅子バスケットと車椅子マラソンを始めた。他者についてみると、まず、A氏を車椅子バスケットないし車椅子マラソンへと「誘う他者」（吉田, 2014）がいたことは言うまでもない。それはA氏の各種目への社会化の契機となったが、別段親密圏を築く関係にあったわけではない。その後、A氏が車椅子バスケットへの社会化を遂げていくのに貴重な存在であったのは何と言っても「師匠」N氏である。A氏は、N氏の他にも「チームメイト」、「体育館の職員」、「Y先生」も重要であったと言うが、A氏の語りからみてそれらをN氏と同等に捉えるには無理がある。

【語り5】のように、N氏は当初よりA氏に車椅子バスケットを「すごく親切に教えてくれた」とあり、A氏のプレーの上達に大いに寄与したとみられる。A氏は上達することで車椅子バスケットの虜となっていった。しかもA氏とN氏の付き合いは練習に留まらなかったことが【語り6】から分かる。A氏はN氏と「晩ご飯も毎日一緒」にとる中で、「怪我」に関わる話も「じっくり聞いたり、聞いてもらったり」と親しい付き合いを続けた。N氏はA氏にとって、正しく「意図的（能動的）にせよ無意図的にせよ、当該活動（方向）へ惹きつける他者」である「導く他者」（吉田, 2014, p.864）と捉えられ、しかも「親密圏」を築く関係にあったとみてよい。

こうした車椅子バスケット界の先輩という「導く他者」ならびに「親密圏」を築く他者は先行研究（吉田, 2012, 2016）でも認められている。この種の他者及び親密圏は、中途身障者の車椅子バスケットへの社会化、換言すれば中

途身障者と車椅子バスケットをつなぐ鍵を握る存在と言えようが、A氏の社会化局面には先行研究の知見にはみられない面もある。

A氏は当初、車椅子バスケット活動とともに、車椅子マラソン活動というもう1つのスポーツ活動も行っていた。こうした複線的スポーツキャリアを有する点については先行研究(吉田, 2016)の対象者である元カーレーサーM氏と同様であるが、M氏がもう1つのスポーツ活動、つまりレース活動もずっと続けたのに対し、A氏は車椅子バスケット活動を続ける一方、車椅子マラソン活動からドロップアウトした。こうしたM氏と異なる点が本稿でA氏を取り上げた所以であるが、A氏は車椅子マラソンで全国大会優勝を果たしたにも拘らず何故ドロップアウトしたのであろうか。

端的に言えば、他者による面が大きい。M氏が車椅子バスケット活動とともにレース活動も続けたのは、それが受傷前に取り組んでいた類の活動であったという点も踏まえるべきだろうが、そうだとするとレース活動において、日常生活でも支えとなる「レース仲間」といった親密圏を築く他者(「つなぐ他者」)が得られなければ継続できなかったに違いない(吉田, 2016)。一方、A氏の車椅子マラソン活動では、そうした他者が不足していたとみられる。【語り7】のように「勝っても1人」であった。「一緒に練習したり教えてくれた先輩」はいたから、練習において他者が不在であったわけではないが、「性格的に皆とワイワイやるのが好き」というA氏にとって「何かさびしかった」のである。「練習が面白くなかった」のも、車椅子マラソン活動における親密圏を築く他者の不足によると言えよう。N氏のような導く他者に恵まれた車椅子バスケット活動とも対照的であり、A氏がそうした車椅子マラソン活動に惹かれなかったのも無理はないだろう。

先行研究(吉田, 2014, 2016)では、対象者のスポーツへの社会化にどのような具象的な他者が寄与したのかが着目されてきた。それに対しここでは、そもそも当該スポーツ活

動における親密圏を築く他者の不足が、中途身障者の当該スポーツへの社会化に支障を来したという知見が得られた。A氏のケースは、中途身障者に限らず障害者のスポーツへの社会化をおし進めるには、そうした他者の存在が貴重であることを逆説的に示してくれるケースと言える。

IV. まとめ

複線的スポーツキャリアを有するとはいえ、車椅子バスケット活動を続ける一方、もう1つのスポーツ活動からドロップアウトした中途身障者A氏の上記キャリア形成プロセス(車椅子バスケット及びもう1つのスポーツへの社会化プロセス)における他者関係性について検討してきた。主な知見は次の通りである。

まず、療養局面で寄与した他者として、「かけがえのない他者」(父親)、複数の「仲間」、それに「寄り添う他者」(親友)が認められ、いずれも親密圏を築く他者とも捉えられた。親密圏を築く他者と対象者との間柄という点では仲間という新たな知見が得られたと言える。こうした知見から、中途身障者において心身ともに過酷な状態にあるとみられる療養局面では、基本的には受傷前に築かれていた親密圏が精神的支えとして貴重な存在となることが窺われる。

続いて社会化局面では、車椅子バスケットへ「誘う他者」が認められた。また、車椅子バスケット界の先輩という「導く他者」が認められ、これも「親密圏」を築く他者と捉えられた。こうした点も先行研究の知見を支持するものであり、この種の他者は中途身障者の車椅子バスケットへの社会化をおし進める鍵を握る存在とみられる。一方、もう1つのスポーツ活動については先行研究とは対照的な知見が得られた。つまり、A氏はもう1つのスポーツ(車椅子マラソン)活動からドロップアウトした。それは、多少ともA氏の性格による面もあるだろうが、特にこの活動における親密圏を

築く他者の不足によるものとみられた。

冒頭で述べたように、障害者及び障害者スポーツの理解はもとより障害者スポーツ振興に寄与し得る知見を得るには、障害者のスポーツへの社会化に関して幅広く研究を展開していくことが重要である。対象としては、車椅子バスケット男子に比して普及度が低く他者関係性が少ないとみられる車椅子バスケット女子、もとより他者関係性が少ないとみられる個人種目、下肢以外の中途身障者、それに先天的身障者等、様々な種目や障害が挙げられる。車椅子バスケット男子についても、先行研究とは異なるタイプの障害者をも対象とし、研究を蓄積していくことが求められる。

付記：本研究は JSPS 科研費 23500750 の助成を受けたものである。

【注】

- 1) 健常者を対象としたスポーツへの社会化研究は健常者のスポーツ振興、特にスポーツの大衆化を推進していくための有効な資料を提供してきた（岡田・山本，1984）。このことに鑑みると、スポーツへの社会化の視点は、障害者を対象に検討する際にも障害者スポーツ振興のために有効な知見を提供し得るに違いない。
- 2) スポーツと社会化に関する多様な研究視点及び研究内容を提示する Coakley and Donnelly（2009 = 2011）も障害者については取り上げていない。この研究領域では、それだけ障害者が着目されることはなかったとみられる。
- 3) もとより重要な他者とは「主として心理的な意味において高い重要性を付与された他者」である「意味ある他者」（後藤，1988）と同義である。
- 4) 従来のスポーツへの社会化研究の概要については山口・池田（1987）、山本（2005）、吉田（2013）、藤田（2013）を参照された

い。

- 5) しかも、スポーツへの社会化研究の主要な課題の1つである社会化プロセスのダイナミズムを捉えたものでもあり、その点でも意義が認められよう。
- 6) 親密圏をめぐる議論は Habermas が初発とみられる。氏は公共圏との関連から親密圏に着眼し、こうした家族を親密圏と同一視した（Habermas, 1962 = 1994）。しかしながら、現代では家族の崩壊や縮小あるいは家族におけるジェンダー等の問題が顕著となる中、家族が親密圏に当たらない者や親密圏を家族の他に求めざるを得ない者が稀ではなくなっている（上野，2009；山田，2005）。現代における親密圏の実相に関する研究蓄積が求められる。
- 7) もとよりライフヒストリー法の今日におけるデータ収集の方法は「口述史の聞き取り」（谷，1996，p.4）、つまりインタビュー法が主流となっている。
- 8) インタビューにおいてはA氏の生活の多面性、言わば『『全方位アンテナ』を張り巡らすこと』（石原，1996，p.33）にも留意した。
- 9) 小林（2000，pp.106-110）によれば、ライフヒストリーは「語りの言葉をそのまま活かした部分と〈わたし〉が解説する部分とを交互に重ねて呈示する形式」である「二重奏形式」により「テキストとして読むことが可能なものになり、他者が理解できるものになる」とともに、読者に対し「リアリティを伝えられる」ようになる。

【文献】

Coakley, J. and Donnelly, P., 2009, Sports in society: Issues and controversies, McGraw-Hill Companies.（吉田毅訳，2011，「スポーツと社会化」，前田和司・大沼義彦・松村和則共編訳『現代スポーツの社会学——課題と共生への道のり——』，南窓社，pp.41-65.）

- 藤田紀昭, 1998, 「ある身体障害者のスポーツへの社会化に関する研究——車いすバスケットボールプレイヤーの個人史より——」, 日本スポーツ社会学会編『スポーツ社会学研究』6, pp.70-83.
- 藤田紀昭, 2013, 『障害者スポーツの環境と可能性』, 創文企画.
- 後藤将之, 1988, 「意味ある他者」, 見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』, 弘文堂, p.58.
- Habermas, J., 1962, Strukturwandel der Öffentlichkeit, Luchterhand. (細谷貞雄・山田正行訳, 1994, 『公共性の構造転換』, 未来社, pp.64-72, pp.207-231.)
- 星加良司, 2008, 「当事者性の(不)可能性——ディスアビリティ・スタディーズの存在理由」, 崎山治男・伊藤智樹・佐藤恵・三井さよ編『〈支援〉の社会学』, 青弓社, pp.209-231.
- 井上俊・船津衛編, 2005, 『自己と他者の社会学』, 有斐閣.
- 石原昌家, 1996, 「沖縄出稼者と定住——異文化接触と同化過程——」, 谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』, 世界思想社, pp.31-61.
- 伊藤智樹, 2008, 「語り手に「なっていく」ということ——輻輳する病いの自己物語」, 崎山治男・伊藤智樹・佐藤恵・三井さよ編『〈支援〉の社会学』, 青弓社, pp.21-39.
- Kenyon, G.S. and McPherson, B.D., 1973, "Becoming involved in physical activity and sport: A process of socialization," in Rarick, G.L. (ed.), Physical activity: Human growth and development, Academic Press, pp.304-333.
- 小林多寿子, 1995, 「インタビューからライフヒストリーへ」, 中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』, 弘文堂, pp.43-70.
- 小林多寿子, 2000, 「二人のオーサー」, 好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』, せりか書房, pp.101-114.
- 野口裕二, 2005, 『ナラティブの臨床社会学』, 勁草書房, pp.193-198.
- 野口裕二, 2013, 「親密性と共同性——「親密性の変容」再考——」, 庄司洋子編『親密性の福祉社会学』, 東京大学出版会, pp.187-203.
- 落合恵美子, 2013, 「アジア近代における親密圏と公共圏の再編成——「圧縮された近代」と「家族主義」」, 落合恵美子編『親密圏と公共圏の再編成——アジア近代からの問い』, 京都大学学術出版会, pp.1-38.
- 岡田猛・山本教人, 1984, 「スポーツと社会化論についての一考察——Social AgentとSocializeeの相互作用の観点から——」, 体育・スポーツ社会学研究会編『体育・スポーツ社会学研究』3, pp.79-95.
- 桶川泰, 2011, 「親密性・親密圏をめぐる定義の検討——無定義用語としての親密性・親密圏の可能性——」, 鶴山論叢刊行会編『鶴山論叢』11, pp.23-34.
- 齋藤純一, 2000, 『公共性』, 岩波書店, p.8.
- 齋藤純一, 2008, 『政治と複数性』, 岩波書店, p.196.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学』, せりか書房, p.60.
- 高谷幸, 2009, 「脱国民化された対抗的公共圏の基盤——非正規滞在移住労働者支援労働組合の試みから——」, 日本社会学会編『社会学評論』60 (1), pp.124-139.
- 高谷幸, 2012, 「〈親密圏〉の構築——在日フィリピン人女性支援NGOを事例として——」, 日本社会学会編『社会学評論』62 (4), pp.554-570.
- 谷富夫, 1996, 「ライフ・ヒストリーとは何か」, 谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』, 世界思想社, pp.3-28.
- 筒井淳也, 2008, 『親密性の社会学——縮小する家族のゆくえ』, 世界思想社.
- 上野千鶴子, 2009, 「家族の臨界——ケアの分配公正をめぐって」, 牟田和恵編『家族を超える社会学』, 新曜社, pp.2-26.
- 山田綾, 2005, 「「新たな親密圏」をめぐる議

- 論——フェミニズム視点からの批判的考察——」,『愛知教育大学研究報告』54(人文・社会科学編), pp.179-187.
- 山口泰雄・池田勝, 1987,「スポーツの社会化」, 日本体育学会編『体育の科学』37(2), 杏林書院, pp.142-148.
- 山本清洋, 2005,『子どもスポーツの意味解釈——子どものスポーツ的社会化に関する研究——』, 日本評論社.
- 吉田毅, 2009,「後天的身体障害者のスポーツへの社会化の諸相——車椅子バスケットボール男子選手を事例に——」,『東北工業大学紀要Ⅱ人文社会科学編』29, pp.47-56.
- 吉田毅, 2012,「競技者の現役引退をめぐる困難克服プロセスに関する社会学的研究: 車椅子バスケットボール競技者へのキャリア移行を遂げた元Jリーガーのライフヒストリー」, 日本体育学会編『体育学研究』57, pp.577-594.
- 吉田毅, 2013,『競技者のキャリア形成史に関する社会学的研究——サッカーエリートの困難と再生のプロセス——』, 道和書院.
- 吉田毅, 2014,「中途身体障害者のスポーツへの社会化に寄与する他者に関する社会学的研究: 骨肉腫を克服した元車椅子バスケットボール選手の語りから」, 日本体育学会編『体育学研究』59, pp.855-867.
- 吉田毅, 2016,「中途身体障害者はどのような他者によってスポーツを継続するようになるのか——複線的スポーツキャリアを形成した元カーレーサーのライフヒストリー——」, 日本スポーツ社会学会編『スポーツ社会学研究』24(2), pp.53-68.